

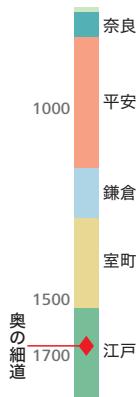
# 奥の細道

おく

ほそ  
みち

## 松尾芭蕉

まつお  
ばじょう



## 那須野

那須の黒羽くろばねといふ所に知る人あれば、これより野越えにかかりて、<sup>2</sup>直道すぐみち

を行かんとす。はるかに一村3を見かけて行くに、雨降り日暮るる。農夫の

家に一夜を借りて、明くればまた野中を行く。そこに野飼ひの馬あり。草

刈る男5に嘆き寄れば、野夫6といへどもさすがに情け知らぬにはあらず。

「いかがすべきや。されどもこの野は縦横に分かれて、うひうひしき旅人の道踏み違へん。あやしう侍8れば、この馬のとどまる所にて馬を返し給たま

へ。」と、貸し侍りぬ。小さき者一人、馬の跡慕ひて走る。一人は小姫6にて、名を「かさね」といふ。聞き慣れぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重撫子7の名なるべし

曾良8

やがて人里に至れば、価を鞍壺9に結びつけて馬を返しぬ。

10

5

1 那須の黒羽 現在の栃木県大田原市。  
2 直道 まつすぐな近道。

3 見かけて めあてにして。

4 野飼ひの馬 野原で放し飼いにしている馬。

5 野夫 田舎の人。

6 小姫 小さな女の子。

7 撫子 秋の七草の一つ。夏から秋にかけて薄桃色の花が咲き、花びらの先は細かく分かれている。

8 曾良 河合曾良（二箇九一三〇）。この旅に同行した芭蕉の門人。

9 鞍壺 鞍の、人がまたがるところ。